

平成17年度病害虫発生予察特殊報第3号の発令について

病害虫発生予察特殊報は、新たな病害虫の発生が認められたり、発生のしかたが例年と異なるなど、特異的な現象が認められたときに発令する情報です。

害虫名 イチジクヒトリモドキ
発生作物 イチジク

平成17年9月、南国市大桶のイチジクで未知の鱗翅目幼虫による食害被害が発生し、高知県農業技術センターで調査により高知県では未確認のイチジクヒトリモドキであることがわかりました。聞き取り調査等では平成16年頃から高知市でも発生が認められていたようです。

若～中齢幼虫は、胴部背面が全体に白っぽく、頭部は黒色、体側面は橙色です。終齢幼虫は体長約40mmで頭部はつやのある黒色、胴部背面は灰色がかった黒色で腹面は橙黄色です。また、白く長い刺毛が生えています(写真1)。成虫は、前翅は褐色の地色に橙黄色、黒色、白色の斑紋、後翅は黄色の地色に黒色の斑紋があるきれいなガです(写真2)。

本種は南方系のガの一種で、沖縄県では土着とされており、九州地域でも採集された記録があります。また、中四国地域では近年、愛媛県、岡山県、香川県、徳島県、広島県で本種の被害が報告されています。

イチジクでは若齢幼虫は葉裏から表皮を残して食害するため、葉脈間に白い膜が残ります。中齢～終齢になると太い葉脈を残し葉のほとんどを食いつくし、葉が少なくなると果皮も食害します。幼虫は老熟すると樹を降り、土中の浅いところで土繭を作って蛹になり、冬期は蛹で越冬します。蛹から羽化した成虫は、昼間は葉裏に生息し、夜間活動をします。また、幼虫の寄主植物としてはイチジク属のイチジク、イヌビワ、オオイタビが報告されています。

耕種的な防除として、イチジクでは若齢幼虫が葉裏に群生する時期に寄生葉を取り除いて処分しますが、本年については気温の低下により発生の拡大はないと思われます。



写真1：イチジクを食害する老齢幼虫



写真2：成虫